古今采雅抄

七八 賀 離別

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらず　　読人不知

我君のちよにしやちよにさゝれいしの
いはほとなりて苔むすまでに

きみがちよにしやちよにさゝれいしの
いはほとなりて苔むすまでに

まゝごひさしくやすまもなりぬ
やよ代とよろむと云ふもあり

さゝれいしのふるは細石にも
出ぬ

君のちよにさゝれいしのいはほとなりて
苔むすまでに

水をさゝれあつまりて巖となりて
苔乃生るまでにとあり

沙長為巖とかゝる也

巖のかたちなりまれたるけのむすまでに
よはうるまでおかりぬ山に拾遺集にハ安法師の歌也

ほうこの河海乃濱のまさごとどうそへたるうちと世乃あり数よせむ
そうしれまさごのうさうるをしやとうぞへてぞうぐちと数乃数
せんとをもひたつ海を河乃海乃数乃也濱といそんとてなり
やとうゆく濱乃まさごと我恋といづをもこれつとおさう河乃
面をもゆくを海を八百日行濱と云やうぐ濱乃まさごと濱
てを同事なり数おかうる事にあり
志かの山さしての磯ふまむ子乃ぞ者ろ沖代をハやちとそなく
指者破ろまむちどりもぎこぐ代をだやを代と唱と也
ちどり乃なくあうハちよくと唱やうなれだいへり志ろ代
山そさしでのいそといそんとてなり軍髪國の名所也
あうとうひ志ぐやちとふとうそへてちめをさてを思ひ者よせん
ほうぐ志ろ年とどさてこがやちとふとうそへてどぐうをこて

思者よまてべきとも也やちとよハハを年なり
仁和乃沖時偽遍昭よ七十賀給ひる歌時乃詞
かくしたくとふをかくふをたくくへて者ろやちとふあかくしもろ
くくもぐつどふもうくも我もなぐくへ者ぐやちとふ
あそくしほくきとも也
仁和乃みとの乃こふ形そくきくる河よ沖おを乃
やそちれ賀よ志ろくよを枝よはくれうるをを乃てを
沖おをふうるうてよそくる

僧正遍昭

ちそやあるれやそうろんつくうふちと数乃坂もちこぬくうも也
神乃さうたうはえをはくゆへよちとせの坂もこ面へこと
なりつえをかあむとて神やさうきんとを。枝乃字河也ふ

ゆづるちと杖乃源もあらぬ歌たりとハ。杖をたくと
いふよ付きておえげる杖ちとせ乃坂を越べきと云。今ハ亦
うゐ乃杖山をふこえてとりたごとくふちとせをゐる事
あるさくれど杖しのころふよる杖て坂をおもとつる也
かりうそれ杖かいまうちまさ乃四十賀九条の家ゑおく
しまる時よよめる

昭宣公太政大臣也。貞観十七年四十也。貞観十四年太政大臣
廿七右大将

在原業平朝臣

さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなるみちまがふかに
老乃きんといふたるみちまがふむらくもざくらちりちがひ
うきこてをれと也。まがふる縁字也。てまれちりて老のくる道

とまどふ物と云。友と秋とゆきるふ定とよめるもあり。紛
ちがふ定たり。くゆるぞかりけりと云詞也。万葉よりふりふるよ
とりの詞いづまでもおなじ也。俊成定家。ほふと云詞ふ
賀よ詠まてぞれ奥ありといへり。是ハ自然乃事なり

貞辰親王家七
さくらてる花乃みこのおそれよそちれ賀まと大井にて
くる日よめる

これおれとう

亀乃尾山の岩ねをとめておつる瀧乃志ら玉ちよのかずかも
かめ乃尾のやまの岩ねをとめておつる。瀧乃志らたま
岩ねをた巾の数よてあるとゆ也。岩ねよ志ふひて岩ねまく
りおつるをとめておたると云。白玉と云ハ。瀧く乃瀧の白
玉まくもちよ乃数とよむべくれどもおれる大井まく乃

賀たれば、ぞうにいれるうへに、龍山よりみかをもうこうえ
あまを、寄さうやうにしあるをとり給へ、とゝろ也。龍を尾
乃ものさはなれども、あの乃尾のとゝろよる紀也
さゝやもれ人こ乃きちい乃ゑれ五十賀たてまつる名
御屏風よさゝのそなのちゝたる人の歌ゝゑ
うゝちゝとゝあゝ
貞保二年戊辰正月一号菊宮母二条后延長二年薨
薬師かさう勢

つゝゝよるゝ月日はおもかて歌みくゝもて書てもくゝ紀
いさゝゝよるゝ月日を行ともおぐゝざるゝ書ゝ
くる紀やうよおぐゆゝとゝ也。歳時春日少と云。晩春乃清
んおゝ〜おをかゝて乃時を書ふるゝ月日はおゝるやう

よ歌ゝゆゝゝ。歌乃ゝ書乃ゝんゝ。月日のもくゝなゝさやうよ
おぐゆゝとゝ。後撰ゝ
行くゝゝと日をもゝれゝよおをかゝて歌〜も行ゝあのゝ
ぞゝ乃ゝ書ゝ日はなぐく書ゝて。歌ゝ書ゝは行ゝてゝ志だゝ乃
経なゝゝむゝと云。一説清涼殿おをかゝて乃清涼の殿。涼殿
面白やと也。宮家に乃説もあれよおゝるのゝ。朗詠よはゝ月
日をおゝるゝれゝゝあり
をゝとやもれ人こ乃七十賀乃ゝゝ乃れ屏風ふゝゝて
ゝゝ

本康仁明第七一品式部卿号八条宮延喜廿六薨母従四
位下紀静子名虎女

まくれて宿よりいんさく梅むすめうちと勢乃うきすとそ人ろ
宿よりやくちくうめんとそこぶちと世のうぐすに人ふと
なり

うせい法師

いまはへはあらさりけるとハたろうもとをもあ〜者ろ路ゆ人
とそ者よちとせを始てたあ〜よせんと世。本ハ字をとあり
ゆくゑひおきてかそあろ第代を神ろ志ろ〜んまろ者のあ
祝者れたあよ。ゆきろゆ〜よろづとといのろ事ハ神で志ろ
志ろ〜りんと〜

藤原三善ろ六十賀ふとくろ

在原志まを侍

ちるかあもちと勢乃後ゆ志ろ〜ゆくふあろぬいよ侍ゆ世そそん

山路をあろ人左原乃と紀ろうとをつよ
者ゆ世を勢ゆもなくなりふゆゆふまろせんと世
ゆ〜みゆ乃ゆゆゆゆうゆよそち乃賀ふむゆあろ
ろうてゆゆゆりろる

素性

ゆろ門ゆゆを松ゆそ者をいそひつうちと勢乃後ゆ信むゆ思ハ
第代を松ゆ者をいそひつうゆゆ。世を約ふゆ世ろう
内侍乃ゆゆゆれたゆ藤原勢信乃四十賀〜〜ゆ門ろ
四季の歌ゆをろう〜ろの屏風ゆ世ろう世ろうゆ
ゆい〜乃ゆゆハ尚侍藤ゆ内大臣ゆ敬二女延喜乃年中
風〜なひちろ延喜十七ゆ従二位大納ゆ左大将ゆ延
喜六年七月薨ゆ年

三月晦日ふるつとたくに第代といふ神うちうん
かとぐ野にの蒙をつこぞ紙ようづといふこうを
神ぐ三うの給りんとも毛海よ頃を世をかめて神よつぐ
ぐうーを紙ふぐ神紙ふ世たうをいをひ再と
いふ
山うをこをうをふみゆうさくーをむうろうのゆさてをうぬ日をる花
ちうろうのゆをてをうるぞ花とやうをぬちう。百般拳形一時
情ぞのーんをう

夏

清ーーをあうをふ部ぐちうろうをとあにもうぶ
くうーとぞをうぶくーをたとをうぶーぶのめづーーある花
とぞふ年をけどもあるぬをいうるう年ぐーとよ

秋

をうを花沉乃松を松風ゆうーふーぶうちをうのをうをうを流
あうをうをうをうをうを百めうをう経信に
おうを門を吹ようーふ住吉乃松のをつえをあーふ白波
とぶ和歌をうくをれうをふぞうを行をうーを
眼乃いうをれをうをうう
ちうう吹をれ沉書をたちぬし山の木葉もいろーさうり沉
千寿乃をうく住保の川寿をうを河ふ。山の木紫もを海
をうをを

松をれとをうをうをうぬを沉ーを山ーをれ沉葉を風をうーを
常盤ようよう我乃をみちをををひて風のーを行をを

冬

志ら雪乃ふり志く時ハみよ志のゝ山下風よ花ぞちりける
雪のふるを花と見んちるを雪と見んにくらべ也
春宮乃生れ給へりける時にまいりてよめる
延喜春宮文彦太子保明親王延喜二年誕生四年二月
十日立太子十六年十月元服廿三年三月廿一薨
典侍藤原よるかの朝臣
峯たかきかすがの山よいづる日ハくもる時なくてらすべら也
春宮乃生れ給ふを春日乃山よいづる日にたとへて
くもる時なくてらさせ給ふべき也

古今和哥集巻第八

離別歌

題しらず

在原行平朝臣

たちわかれいなばの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこん
立わかれいぬるとも人の待ときかばやがて帰りこんと云
おていなばとそへ峯におふる松を待によひかけたり。いなばハ
因幡国乃任をへて上洛乃時よめり。いなば山ハ因幡也
丹後にあまのはしだて、浦、武蔵にいなれむさし野と云
がごとし。後成ハはやあまりにくさりゐてよろしからく
ざるをどくつりこんといひなし給ふ。歯(?)あやまりといふ
定家ハ古今集秀歌十首乃内なり
読人志らず

よろつなく秋の萩原鳴きてまちひわ人をいはとうけたまはらん
ころもをわらしをもちつ鳴萩の宝とぞ鳴立鶉わ人といは
へつむさゝるぞ行へきといふあふをかへていへるなりずるに
廉乃おゝ名なり。日本紀に須賀廉と云ふもとさゝへさそらりと
いふ蜂也。東国にハ蜂をもちれとよふとぞ。日本紀によく見り
妻されたもつゝなる野辺乃時鳴なとく妹にあはれとよぶあり
はかなき妻といひはなくぎれといへど。廉乃かはりなれど時
鳴なとくといへんとくなれば秋の萩原になりん廉鶉
なし。堀河院百首忠房
鳴んそ立なるもむしみさとろる鳴小萩か原乃秋のゆふせ
さとらふきに野中の草やふてらむわりふ人の笠見みえぬハ
あわらの二首廉ところえたり

かくうるを花やなの人つそふそつらとも人とかに出てうさんやハ
くさらなく春もおわらとも人をころゝにわくらもとさ
ドさと也人とはゝをものたまひてゆくと云かなり
字家ハ云。身ハ野山乃末にありなからかに人とおつ
せぬおゝろなりといへり。後の字をおくるとよむ。これらさ
大和物語に六詞ニ遍昭出家乃時山もちるおとこの宮そ
かくれありさし時五条の后に御使をたまひて侍り
くるふおもさる花をも見れども乃ぐすされ行らぬよしなかに
てよみあるしあり
とみくちふるのみちのくのをけにはらるる時より
母乃よろ
きちらちまのおやのもとらとあひそふうんけつせとらるよりあそ

子乃ゆきわかれゆくを親のまもりとあひそふ心ハわが身
をとゞめさせ給ふなとぞ也。一 説たらちねハ父母を
兼ぬる也
百七 たらちねの親のみならず弟をもつねにまもるといふ事を
おれも母なり
後 たらちねの親れとてもうきよ乃秋のうさをとるそぞやま
ぞん。おれハ父なり。たらちねのおやハ母なり。弟兼なり
母とちくおやとよむ。垂乳根(たらちね)。垂血根
さだときのみこの家にて藤原のきよふ(清生)があふみのすけにまかりける時に
むまのはなむけしける夜よめる
紀としさだ
けふわかれあすハあふみと思へども夜やふけぬらん袖の露けき

けふわかれあすハ何かと思へども袖の露を紀ハ秋や
更ぬらんと也。あすハ近江などへ行く
なき秋更て袖のくさく物するも袖のぬるるを露を紀と
同
こしへまかりける人によみてつかはしける
かへる山ありとハきけど春霞たちわかれなバこひしかるべし
かへる山ありとハきけどたちわかるれバ恋しかるべし
こひしくあるらむなるも也。たちる霞ハ立んといはん為也
人のむまのはなむけにてよめる
紀つらゆき
をしむから恋しき物を白雲のたちなん後ハなにここちせん
餞別(はなむけ)をおしむから恋しき物をたちなん後ハいかゞある

ちゝ乃あるべきぞと也。これを志る事ハ立といふん

料ちん

友ちゝの人のくるまへさゝりたるかゝる

在原志多ちな

おもひもよらぬと思ふやうにて立しき

るゝれて相をとめぶるとおりへばかくみるゆるをやくん

乃立しきと也

あつまのゝ車さゝりかまる人によりまてはりりぬ

いかこ乃あはれ稼き

みりへとも身をよこまほいふみやねんと思ふまたくくてそやる

はれくゆるやとおりへども心ころ乃ゆえかなきぞ。身を

まくるかとひまきれぞ。思ふねんと思ふりそへくと

やうと也

あつまのおもくへ人とゝられたる所かよめる

なゆのいの行ほをと思をとつめよ

お坂乃室しはべりし絶物なりしハあつはしりて君をとりめよ

はつきる此関さしとる物なりしハとゝむる傍なれバ君を

とゞめよと也

髭志つきを

よみ人不知

かく衣志る日ハさりし絶物乃そこそしゆきえけぬへき物を

はすゐをある人はらきとたまりりてあそくしきめ

てりつきそよし為てきをりる人とをとて　そそく

あきらめんゆへ川とうりいふさまる所よとりそもうりも

いふてよみくはらりしうり

若立日をきゝし給ふ時よ我身をたのみして、とゝろく
ゆけど消ぬべき物とも也。おきつ種をもとゝぞいふ衣
はそのつとめんたのたより
ひとちへすかりなる時よ藤原のことゝしよりを
てはかりしなる
露。或本に長はゆくとよむてうを用也

羈

あさみどりかんへき君としたのまなはせひとめる草枕なり
給ふまみるべき君とそのまよば。なりひさの草枕と也
ざることしと歌よとく入たるかと也。あきたなげ。給つけ同
事也。庭訓給ふまと云同じんぬすら。後撰よ
給ふまに世のうたりを思ひつたるあせしまふ迷はへ否をり

いつはとも日乃時なりも我妹子がとひきれ姿給ふまかなへん
案養ふよ。給ふ食とゐひはたれも此名かゆへに
紀乃むよきてあたゝまへさくのなる時よ人の恋り
厭とふかくはらの行さこ出きるとてまゐりやしたれを
女のよるそて出きりたる派
昆事と云。暁やかわせ。恩田の任よおもむく肉ちるを
いはふりとるさいひ悔こえとと云

読人しらず

こふしぬとんやんよ命あらんは我やこふる人やとはぬ世
おつきるゝ死人のとりだはらべきかえしるむは命あ
らむしふそんかんゆべきとも也。あれをお教とてつれを
こふべきなどいつとてあるこのころは志てむぞ我はこふる

ましたどいふよし也。鎌倉こもれる方也
あひしりて待りける人のあつまれるへまかりてきゝを
とく承りてよめる

かくや姫

雲ゐにはかよふにけれのおくれぬもそわかるゝ人に見捨られおもり
遠くもそひ捨くあろ乃おくれぬもおもとく人に
ふきりたちとせ也。とそくもといはんとてぞ雲ゐのもとに
て一禅師説出くゆく人によんとさくへやるかどに贈り
のこりとまりなかなかなりきづてつくなりたまと無伊勢九
我さへそのくおちぬべきてる子乃歌に比すしんとそ見
えまつり
友乃あつまへまかりまかる時りしよめる

よしのの乃ひてとり

あら雲れこあるころに立おちころをぬきとくく猿乃郎
白雲を立ちまされ。猿まれぬさをとちくとかぶんをとぶく
りよた
みちれくるへてやるる人によみてつかはしける

悠しゆさ

あら雲乃やへふるさのるとちりまでも忘れん人によんて何る
白雲れ厘へかさぬるともと心の御ぶつたちし也
人におくれたる時ふよりみる
わかれてふかしはあすもたつたくふんに立ちてまひしかるらん
おもひやすみさふともあらぬにおもふに立ちてまひし
こまとせんのしうてといちんとよくるするもとりの深き子を

志むとゝむ所なり

あひしれりける人のこしのくにゝまかりて年へて

京にまうてきて又かへりける時によめる

凡河内みつね

かへる山なにゝはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそ有けれ

きこへりてとゞまるかと頼みつるにまたかへれバなにはそへあり

てあるかひもなき山の名也といふ心也されハあくき

作者ありてよむ也

こしのくにへまかりける人によみてつかはしける

よそにのみこひやわたらん志ら山の雪見るべくもあらぬ我身ハ

白山の雪見るべくもあらぬ我身かくれなきこそ恋わ

たゝむとの心をいひよりたてたる也

おとは山のほとりにて人をわかるとてよめる

つらゆき

音羽山こたかく啼てほとゝぎす君がわかれを惜むべら也

きこえぶおをおし　こゝ音羽山に郭公の啼とよそへ讀り

藤原乃のちかげが唐もの使に長月のつこもり

かたにまかりけるにうへのをのこともさけたうへ

けるついてによめる

藤原かねもち　兼茂延長元年参議

もろともに啼てとゞめよきり〴〵す秋の別ハ惜しくやハあらぬ

きり〴〵すもろともに啼てとゞめよ秋のわかれの惜しく

あるにと。後蔭が事をよそへて蟋蟀にいへる也。からもの

使とハ唐船来る時百済より調来る時勅使をつかはし

すぐれたるをもめし使とも云。神功皇后三韓をたいらげ
給ひし後、毎年八十艘乃みつぎ物をたてまつる。
欽明乃御代までたえず。其後ハたえだえしてたえぬ。聖
徳太子摂政し給ひし時、隋へ使をはじめて給ふ。これを
遣隋使となづく。其後唐代となりて遣唐使大使
を遣はす。大使副使判官主典などの官を定めらる。
天智連々けはしきひとをつかはし給ふ。承和乃帝遣唐使を
ゐる乃時、大内建礼門乃おまへにて百官以下になむけし
給ひしにこれをもひろく定むるぞ。延喜の御時まで、かな藤
原忠平の時、綱をたてまつる。其後御代に唐の代亡じ
よりてはこのひとをつかはし給はず。其後高麗乃使來
たるもあり。其後使を延喜までたえず

杖霧乃とこよにちかくなりぬればおもひもかけぬ世にやすむらん 平元とみり 元親蔵人右兵衛尉
おいておれをばたすけぬおもひいでやまからんとやへん
杖霧とは
源乃さねかたくしへゆあらむとてこしらゆる時
山樵ふるくまれ杖しかるふえてある
志徳め 摂津国江口遊女
命さへふんふくそねたくいちすふつまれ乃かくのしくくまし
いのち乃あるふよりておれ乃かへしさと也
山樵より杖をひの杖をたてとくるよ人をころして也
かくつりしておれ杖しらるたにあれ
杖をひの杖太和す。是ハ山樵の西を同じあらじといふ

たゝひの松とそいふ。神ゝひのもりとよむべきなり

源さうの実方をかな

人やりのみちのくにくだりたるこゝいさこゝとゝひていさ神のみち
人屋の乃なるゝ神ぞゆくがうゝといひくいぎやうつゝむ
ゝゝ人やりのをいんゝ人のやうにたさを迷せゝ迷て
いるをも人屋りれみちゝゝゝゝいさゝゝを行うゝさ迷一様
はなれよ源氏よ。柳未遠女三宮と玉鬘の間よ人やりみ
らぬたゝゝゝに秘をうくだらうとゝる。我ゝとたゝ人ハ
皆人屋りなゝぬたゝ。源恩欲意行ゝても我ゝとゝれ
手也いさゝゝしハぬ。源ぞべゝゝも
いゝゝたれゝゝうゝ孫とさゝゝいひゝるゝゝふ源ゝ

菊原うゝゝゝ

たゝゝゝれゝぞまゝみ。保茶ふ。あ無ゝくゝま除よハ為ゝも三ゝゝ長
名ゝ物ゝゝさふ為ゝゝゝまてゝきゝゝゝ男なれゝゝゝ人ゝゝさふゝ
為ゝもゝゝゝまゝゝと迷

菊原乃ゝれゝゝゝむゝゝのゝゝけゝゝゝゝゝゝ原
ゝゝよゝ坂をゝゝゝゝゝゝゝとてゝゝゝゝゝ

たゝゝゆゝ

かゝゝこゝてゝれをゝゝゝゝ坂ゝ人ゝのゝたゝゝ名ふゝゝゝゝ
ゝくゝゝこゝてゝゝれ極ゝゝゝゝゝ坂といふゝ。人ゝれゝたゝ名
ゝてゝゝゝゝあゝと迷。むゝゝ
ゝゝあゝゝ

ゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝあゝ

蓮原かのぼりけ物語

ちゝのたゝゝ山たゝゝ林どもゆきもてゆくもん
わんと西雪のまふくハ白のあるゝ乃山也
人の花山よまうてきてゆきうつゝとうりたんと
しるゝ附ふしある

僧正遍昭

夕くれのまろねたる山とかんこなるむしろハあるゝ屋とうるゝ
しるはたゝえでとて人の宿ふとまるべきとゝ名所をお
しゑる也
山よりかりてゆりまうてきてくるれるぶし
こゝふしあふ

幽仙法師

おれとて山乃さゝふまろせてむとうんとゝハ花のまふく
ゆゝ新人を我ちゝゝハとゝぐゝるれで花よまゝ勢た
ふなり
うゝん院乃みこの金剛金ふ山よのかりてゝうゝ
りさゝゝの花乃をとゝふくしある

僧正遍昭せう

山風よさゝゝ吹まゝ乱まゝん花のまゝゝれよ立とまるへく
やゝゝ勢よさゝゝ吹まゝ紀花をとゝぶ勢人のゆゝゝ
てゝもちゝまるべゝふゝゝ紀ゝ乱ゝ家波と神ゝゝ以ゝ

幽仙法師

ゝとゝゝハ花とまるへく白ゝゝ人ゝ花のうゝゝゝやハあゝゝ

くれぬべくなりぬべきをとて人へ参るとて花の
うえさかりなるをば見ぬ人なくてといへる也
仁和の門みそかぬ人なし　しまいの河よりあれ酒
流れてはやり結まるにあり

第五十八　法師

ある法師ありけるが酒をのみやまをいかるるん
ぬるとて酒をのみけるとて人にあらそひ
みそかんと也
かんなりの法師ありけるが　たちてかりの自地やうさなりを
たうへくて夏のはつかの　ゆうれをゆうりまて結て
さうり出るをとりかさねてとりて
ありさまは酒屋にてはたらきたる酒自酒と云

第五十九　貫之

ある人貫之の花をそなへぬる物をもとめんとて
花のそなへをあるべきやうをばあるまじきて
しと知りぬと云
とてありけるとか

第六十　賢人王

ある人のかををたうぬまふ秋の月毎と分ちよりまる
毎ふまづあるくをむしりもやむしんの人のかををたうる
また秋の月毎と分ちあらにくると也
くさはおりさとにたうめて物語しくおれる月
ありある

みたる

わかるれどうれしくもあるかあるひハ逢見ぬさきに何を戀
あひみれバこそわかるれあひみぬさきにハ何を戀しくおもハまし　こそと
もいふべき事のあまれバうれしくもあるといふ也
題しらず　讀人不知
あかずしてわかるゝ袖乃白玉を君がかたみとつゝみてぞ行
なみだをもいはでたまとよそへていへりそれを形見に
ともよそへられ
かぎりなく思ふ涙にそほちぬる袖ハかわかじあはん日までに
かぎりなく思ふ涙にぬるゝ袖ハ又あはん日までひるまじ
となり
かきくらしことハふらなん春雨にぬれぎぬきせて君をとゞめん
ひとしくらしことくもふらバ春雨に君をとゞめしてとゞめん
とまらバぬれぎぬぞ春雨にぬれぎぬきせてとゞめん也
一説ぬれぎぬといふハなき名をいふといへども未歴
さりしかのいまだ春雨にぬれぎぬきせてといへバ一説にハ人
の旅に出んとする所が雨故にとまりたくバ出んといひし
まゝがそらごとふるべきたらバさてかゝることを
かたらんといふなり
春なれどさくてふことをぬれぎぬにきするばかりの花ならば絶れ
花をさくといひふれど證なくちまずぞ咲かるといふが
ぬれぎぬたるをいふ也
ぬれぎぬと人にはいはん紫のねずりの衣うはぎなりとも
和泉式部が戀の也。是もあらしかなる紀行をとふあるとや雨
教長卿云ぬれぎぬきせてといふぞそらごとを以て君をとゞめん

[illegible]

[illegible]

[illegible]